

会 議 録

日 時	令和2年12月15日(火) 14:00~15:30
場 所	総合文化センター 視聴覚室
件 名	令和2年度 第5回社会教育委員会定例会
出席者	社会教育委員：有賀秀雄、小栗正敏、安藤隆宏、酒井周文、安藤徳善、岩島留美子、 小木曾恵美、伊藤孝一、浅沼克郎、山田秀樹 県関係者：原賢志(東濃教育事務所教育支援課課長補佐) 欠 席：牛島正治 市関係者：小栗茂(中央公民館長)、吉村美信(統括コーディネーター) 事務局：工藤剛士(同課長補佐)、野田祐作(同主査)
議 題	1 挨拶 有賀 秀雄 代表 昨日の天気予報のとおり、寒い一日となった。ここからでも屏風山の冠雪がうっすらと見える。明日はさらに冷え込むそうなので、くれぐれも気をつけていただきたい。 コロナ禍は止まることを知らず、我々もまた、いつ感染しても不思議ではない。こうして会議を開いているのに「人と会うな」、「出かけるな」と言えば矛盾しているように聞こえるかもしれないが、速やかな議事進行に努め、感染リスクを下げたいと思う。皆さんにおかれても、生活の中で極力の注意を願いたい。 さて、学期末の忙しい時ではあるが、本日は稲津小学校長に来ていただいている。稲津町における地域と学校の協働について、最新の動向をお話いただけると思うので、しっかりと聞いて「研修」にしたい。また、恵那県事務所から原教育支援課課長補佐が、市教育委員会から前回に続き、吉村統括コーディネーターが、オブザーバーとして参加される。吉村コーディネーターは、市全体の動きを把握しながら仕事をしてみえるので、行政の動向等についてもお聞きできたらと思う。 資料を拝見させていただくと、稲津小も釜戸小と同様に、学校運営協議会委員(案)の中に社会教育委員の職名が見られる。地域と学校の協働推進について、社会教育委員の役割に期待がかけられている。この流れにどう関わっていくか、委員一人一人の自己研鑽も必要だと思う。折にふれて教育長とお話する際も、「社会教育委員は、学校運営協議会に加わってもらえますよね?」といった言及がある。自覚を持って取り組まれない。 2 地域と学校の連携・協働について ※稲津小学校、稲津地区の具体例から学ぶ 稲津小学校 田口 宏二 校長 ・生まれも育ちも市外。瑞浪市については殆ど土地勘がなく、本年4月の赴任以来、前任の後を継いで手探りで進めているような状況。まだまだ力不足なので皆さんの意見を聞き、理解を深められたらと思っている。 ・今年度の稲津小学校は、204名の児童が在籍している。コロナ禍によって年間計画に大

きな狂いが生じる中、地域や保護者の協力を得て工夫を重ねている。お手元に配布した PTA 広報「八束穂」にも記載させていただいたが、当初 9 月中旬に開催する予定だった運動会は、10 月 31 日に開催。他校では日程や学年等を分散して開催する例もあるが、本校は保護者の協力をいただき、一部内容を縮小しながらも一斉開催することができた。社会見学は、行き先を県内に変更。6 年生の例では、岐阜城や大河ドラマ館等を見学した。地域の歴史を、より深く知る契機となったのではないかと。子ども会とのタイアップでは、さつまいもの苗植えを行うことが出来なかったが、収穫は例年どおり行うことができた。また、授業参観が中止になり、保護者から「子どもたちの様子が分からない」と不安の声が上がったのを受けて授業風景を生配信するにしたり、「ありがたい」との意見をいただいた。ある意味ではコロナ禍をチャンスとし、コミュニティ・スクール化後の学校運営につながるような様々な変革が進んでいると言える。

- また、今年はコロナ禍の影響で猛暑のなか登校する日があった。児童の健康が心配だったが、交通安全協会や PTA など地域の方々が登下校を見守ったり、通学路にミストを散布してくださったりした。また、日帰りとなった修学旅行の終わりに、稲津町子ども会連合がシークレット花火を打ち上げてくださり、感動で涙ぐむ子もいた。こうした経験から、「声を挙げると助けてもらえる稲津町だな。」と実感しているところである。
- こうした取り組みは、ケーブルテレビや地上波にも取り上げられており、また、男性アイドルグループと賛同企業で運営する「ハローニュードリームプロジェクト」の HP 上でも当校が紹介されている。今年になってからは稲津小学校の HP を更新することにも力を入れており、毎週 3 回ペースで行っている。地域と学校の協働体制が充実しつつある中、より広く共感を得るために、PR 活動に力を入れている。
- 本題に入らせていただきたい。地域学校協働活動の推進については、前任者の引き継ぎを受けて進めているところである。まずは人材の洗い出しを行うため、誰が、いつ、どのような形で学校運営に協力してくださっているかをリスト化し、整理した。
- 学校運営協議会については、令和 3 年度の立ち上げを目指して準備を進めているところ。令和 2 年の学校評議員会を「学校運営協議会の準備委員会」と位置付け、メンバーを 5 名から 12 名に増員。区長会長、公民館長、コミュニティ所長、社会教育委員、まちづくり推進協議会理事長、PTA 会長、集落支援員、地区子ども会長、スポーツ少年団、学童クラブ、交通安全協会、主任児童委員をお願いした。しかし、まさに動き出しの時にコロナ禍に見まわられたほか、自分自身が稲津町に全く土地勘がないこと、当該団体の役員が年度替わりで一新されていたことなど、多くの不安が重なった。8 月になって学校運営協議会企画会（学校評議員の主だったメンバーが参加）及び第 1 回学校評議員会（兼学校運営協議会）が開催できたが、そんな中でまずお話しなのが、コミュニティ・スクール化に向けた稲津小の 4 つのスタンスである。一つは、今ある活動が既に地域学校協働活動であること。一つは、稲津町には、これまでに培った財産が有ること。一つは、それらの活動や財産を大きな一つの組織として、体系化したらどうかということ。最後の一つは、無理して新しいものを取り入れるのではなく、既に有るものを大切に、価値づけていくことが肝要ではないかということ。すなわち、新しい体制を早急に構築するのではなく、令和 3 年～4 年度にかけて少しずつ検討していくということである。
- 以後、主に企画会（学校評議員の主だったメンバーが参加）で準備を進めている。来年 2 月には各地域団体に進捗を説明し、3 月には学校報にて広く周知する予定。
- また、学校運営協議会のスローガンも検討している。「ふるさと大好き 地域に誇りを持ち、自分から働ける子」が案として挙がっている。

- ・このほか、年間計画（案）や組織構成（案）も検討している。代表会の中で合意された指針や計画について、学習支援委員会、安全環境委員会、地域交流委員会の3つの部会が具体的な活動を実践していく、という形を構想している。特に、PTAの方々には今よりも深く学校運営に関わっていただきたいという思いがあり、各委員会にPTA役員の方々が入っていただくことを検討している。
- ・まとめとして、改めて稲津町の良い所を考えてみると、「これまで積み重ねてきた財産がある」という点が大きいと思う。一つの町に一つの小学校で地域と密着している点、住民サイドの意識が高く、建設的な意見が出てくる点などが大変心強い。コロナの影響で中々身動きが取れない中であるが、地域との間に更に強固な協力体制を築けたらと考えている。地に足のついた組織づくりを続けていきたい。

社会教育委員 小栗 正敏（稲津地区 社会教育経験者）

- ・本日は、一人の町民という立場から所感を述べさせていただきたい。
- ・稲津町は小里地区と萩原地区が一つにまとまって形成されている町である。屏風山を左に仰ぎ、中央を小里川が流れる盆地地帯となっている。比較的瑞浪市の中心地に近いということもあって、少子高齢化の中でも、人口変動はそれほど大きくない状況。新規住民には外国籍の方もあり、国際化が徐々に進んでいる。近年では大型スーパー等の出店で利便性が高まっている一方、昔ながらの景観もそのまま残っており、子どもたちはおおらかな環境でのびのびと育っている。そのため、警戒心が薄く、少々人懐っこすぎる子が多いとも言える。コロナ禍とはいえ、先生方の日夜のご尽力のお陰で毎日元気に、楽しそうに学校に通っているなど感じる。
- ・先ほどのお話にもあったように、コミュニティ・スクール化に向けた動きは、学校報等を通じて随時情報提供されていることから、町民の間で理解が広まってきていると考える。「地域と学校の連携自体は、ずっと前から出来ている」というのも、その通りだと思う。こうした下地に加え、学校側の慎重な根回しもあって、企画会も準備委員会も順調に進んできたのではないかと。今あるものを活かしていけるならば、来年度から学校運営協議会を動かし始めることについても、さほど危惧していない。ただ、そのためには市民への周知は更に徹底しなければならない。今後も、社会教育委員会の意見を参考にしながら進めていきたい。町民として、社会教育委員会の活動に感謝している。

質疑等

- 委員 3月まで稲津小学校長を務めていた身として所感を申し上げますと、昨年、「3年後を目途に学校運営協議会を立ち上げる」という要請を受けた時は、正直手探りの状態で準備を進めていた。本日の資料を拝見すると、当時、地域の方々に口頭で説明していた事が文書化されており、着実に準備が進んでいると感じる。「今ある連携を体系化、意味づけしていけば、地域にも学校にも負担が少ない」とは、当時から申し送りましたが、その通りに進んでいるようでありがたい。焦る必要はないと思う。コロナの影響で無理ならば、再来年からでもよい。今の活動を維持しつつ、学校運営協議会の活動として、何をどう位置付けていくかをじっくり考えていただきたい。
- 委員 本日の資料に「外部指導者リスト」が添付されているが、大変重要なことだと思う。誰がどんな協力をしていたか、非常によく分かる。これからも活かしてもらいたい。小学校では、特に4年生の課外活動が多いのではないかとと思うが、例えばごみ問題を扱うとして、クリーンセンターの職員にお願いしようと考えた時、それを実現するた

めに依頼を出し、日程を調整し、お膳立てするまで先生が行うのは大変ではないか。リストを活用するためには、コーディネーターの活躍が必要となってくる。

また、先ほどの説明の中で再三強調されていた「周知」も、非常に大事だと思う。元々、稲津町は地域学校協働活動の基盤がしっかりしていると思うが、これまで個別の団体と学校の連携だったものを、地域と学校の連携のもとに集団化していくイメージが必要だろう。市全体では、公民館と地域が一体化していない地区の問題もある。

また、コミュニティ・スクール化は地域と学校の、双方向の活動である。「学校が地域にどう協力するか」というビジョンも必要ではないか。釜戸町の例で言えば、「花の苗植え」の担い手が高齢化していることに伴い、学校と一緒にできたら、と思っている。そうしたことは、地域の方からも連携の形の提案があるといいと思う。

最後に、企画会で考案されたというスローガン（案）は、大変短くて良いと思う。ありていに言って、長いものは覚えられない。地域の理解を得るためには、端的に、わかりやすく指針を示していくことも大事では。

委員 先ほど申しそびれたことを付け加えさせていただきたい。一般的なイメージで、「地域の方」とは、保護者よりも上の世代ではないか。そういう意味では、アナログな広報やアピールの発信手段もあると、より理解が得られやすのではないかと思った。

委員 便利なツールは便利に使うとしても、結局は人と人との結びつきをどう深めていくかが大事だと思う。高齢者は様々な教育財産を持っているはずなので、それを借りながらどう組織化していくか。ともあれ、働く世代の参画を促すことは大変。コロナ禍のお陰で尚更だろう。「元気なお年寄り」をどう活用するか。そういう視点があると、話が進みやすいかもしれない。人に頼られ、自分の経験を社会に還元できる機会があるのは、嬉しいことの筈。声をかけられるのを待っている方もいるのでは。

委員 新しいもの作るのではなく、今あるものを使って、ゆっくりと進めるという意見には大賛成。ところで、本日のレジメや学校報を制作されているのは教頭先生だろうか。素晴らしい資料だからこそ、先生達の負担感はどうかと心配になった。そもそも、学校の負担を減らすためのコミュニティ・スクール化なので、その推進が過度に負担になるようなことがあってはならない。特に今年は、コロナ対応の1年で大変だと思う。

なお、外部講師を招く授業は、カリキュラムの中でどのように位置づけられるのか。総合的な学習の時間か。色々大変だとは思っているので、とにかく無理がないように進めていきたい。焦らず、ゆっくりクリアしていけば良いと思おう。

校長 負担感が無いと言えば嘘になるが、後々楽になるためであると考えている。協働活動の位置づけについては、例えば学習支援委員会の活動であれば、総合的な学習の時間の中に入ってくると思う。安全環境委員会や地域交流委員会の活動は、行事の一つになるのではないか。いずれにしても、既存のカリキュラムの中に位置づけ、組み込んでいく予定である。

委員 前回、今回と各小学校の取り組みを聞き、「着実に進んでいるな」という気がする。ただ、「慌ててやらなくてもいい」というご意見があることも本日改めて確認した。PTAの協力を仰ぐのは大変良い案だと思うが、土日以外の行事にも参加が求められるようになることもあるのか。その場合、仕事を休まなければならないこともあると思うが、完全ボランティアとして参加するのか。その辺りも考えられると良い。

公民館の無い地域はどうすればよいかというご意見があったが、瑞浪、土岐、明世の3地区はコミュニティセンターが無く、集落支援員が西分庁舎で作業している。瑞陵中学校を取り壊さず、地域学校協働活動の拠点とすればよかったのと思う。

また、中央公民館も地域と密に関わっているとは言えず、公民館事業に高齢者が興味を持っているという話も聞かない。住民の理解を得るために周知を行うことさえ難しいと思う。

委員 先ほどからご意見があるように、短いスローガンがとても分かやすく良いと思う。

学校運営協議会の立ち上げ後、毎月のように様々な活動を予定されているのは素晴らしいが、それがかえって先生達の負担とならないようご検討いただきたい。

こうしてリスト化できるほど、稲津町には豊富な人材がいるのだなと思うと、それだけで温かみを感じる。また、そうした実感を子どもたちにも持ってほしい。それが愛郷精神を育むことにもつながっていくと思う。

委員 以前、稲津町の学校に赴任していた時も、「稲津町の皆さんは、学校に協力することを楽しんでいるように見えるな。」と感じた。本日のお話を聞いて、それを思い出させられた。「子どもの遊び場を作る」と言って、3日くらいで砂場を作って行かれたこともあった。学校としては、そういう超人みたいな人に頼り切るのも良くないかもしれないが、いずれにせよ、稲津町には良い地域性が育まれているなと思う。特に、PTAを中心に…という発想が生まれるのが、釜戸町と違う点だと思う。釜戸町では、まちづくりが積極的に中核となる印象だった。現役世代の方が組織の中心になると、行事の日程や開催方法なども見直す必要があるかもしれない。

一つ思うのは、外部講師は人柄も思想も人それぞれ。それをカリキュラムとして、正しく教育に結びつけるには、先生が指導案を作るとか、講師役を慎重に選ぶとか、そういう所で負担が発生しないだろうか。ここだけは、「地域に投げれば解決する」という問題ではないと思う。

委員 陶のコミュニティ・スクール化も、まちづくり推進組織が中心になると思われる。

地域学校協働活動を推進していく際に、「子ども（当事者）の意見を聞く」ことは案外難しいと思うが、稲津町では双方向のコミュニケーションができており、色々とユニークな活動が実現していると思う。子どもが主体的に企画に加わっているから、資料に出てくる行事名などを眺めているだけで、「何だか面白そうだなあ」と思う。子どもたちも、主体的に参加することが刺激や成長につながるだろう。

地区公民館が無い地域でどのように地域と学校の協働を推進すれば良いか、校区が複数の地区にまたがる学校はどうすればいいか、など、懸案は尽きないが、そうした場合にはむしろ逆に、学校が諸地域同士の連携の要、軸をなす場とはなれないか。

まとめ

・吉村統括コーディネーター

前回から2回続けて社会教育委員会に参加させていただき、お話を聞くにつけて一つ思うことがある。「釜戸町はすごい!」、「稲津町はすごい!」というのは確かに事実だが、そもそも瑞浪市全体として、どの学校もこれまでに地域と学校が関わる取り組みを持っているのではないかと。つまり、地域学校協働活動の基盤は、既にできているのではないかと。そういう意味では、これから先、連携の推進がしやすく、ありがたいなと思う。本日の講話に挙げた、稲津小の修学旅行後に行われたスライドショーの放映や花火の打ち上げは、自分も参観させていただいた。本当に感動的な光景だった。

また、本日の質疑では、社会教育委員の皆さんから「資料を作るのは負担ではないか」、「外部講師を招く際の準備が負担ではないか」、「慌てずゆっくりでいい」といったご意見がたくさん挙げられたことについて、そうしたご意見が出ること自体に率直な驚きがあり、

大変素晴らしいと感じた。地域の方々が、学校により沿った目線で見守ってくださるのは、本当にありがたいことだと思う。市教委の立場では、令和6年度までに全ての学校で学校運営協議会を立ち上げる目標で進めているが、既存の活動に看板を掛けるだけでも、その先が見えてくると思う。

公民館が有る地域と無い地域のお話も挙げたが、集落支援員については、瑞浪市内全地区に配置されている。県内で40数名しかいない役職が、瑞浪に8名もいるのである。土岐、瑞浪、明世の集落支援員は、公民館やコミュニティセンターが無いからこそ、地域のことを考えて能動的に動いており、大変な熱意とアイデアも持っていたらっしゃる。

個人的な腹案ではあるが、そうした地域には、学校の中に、地域の方々が入って活動できるスペースがあってもよいのではないかとも思う。いずれにせよ、地域をリードする方々の中で「学校と地域をつなぎ、なんとかしていこう。」という思いが、徐々に根付き始めているということは強く感じる。社会教育委員の皆さんも、前向きで建設的な意見を述べてくださるので心強い。

・小栗中央公民館長

率直に、コロナ禍ではあるが、逆にコロナ禍だからこそその積極的な動きがなされているなという印象を受ける。修学旅行後のサプライズなど、稲津町では本当に良い空気が醸成されており、それが更に、子連やPTAを介して協働の形となって広がっていくのではないかと思う。

学校が声をあげると、地域の方が助けてくれる。そのご助力で、「子ども達にこんなことをさせられた。」という声があがる。それを学校が咀嚼して、更に良い活動につなげる、こうした活動の輪こそ、真のコミュニティ・スクールの姿だと思う。実践に期待したい。何年度までにと目標の定められた学校運営協議会の設立の話が先行してしまうのは仕方がないが、「つまりはこういう活動だよ。」という、具体的部分が更に見えてくるのが、地域の理解や共感を得るための最短の道だと思う。

・田口稲津小学校長

実を申し上げますと、企画会でも「学校の負担はどうなの？」という声はいただいていた。当然、この連携の本来の目的の一つに、「教師の負担を減らす」ということがあった筈。だからこそ、無理をせず、地に足をつけてじっくり進めていきたい。

・有賀社会教育委員代表

本日、沢山のご意見の中に挙がってきた、「あるもの活かして、ゆっくり進める」という考え方。実際これは今、岐阜県も「そうでなければ立ち行かない。」と思い始めているところである。行政計画に照らせば、今年が試験、来年が本番というスケジュールだが、感覚的には、来年もまだ「試行の時」という位置付けで良いと思う。実際、先進事例とされる白川郷でも3年、坂祝町でも2年の準備期間を要している。瑞浪の規模や性格を考えれば、これよりゆっくりでも不思議ではない。

稲津町の組織系統について、企画会が計画を立てて、委員会が実践するという体制は理に適っていると思う。ただ、ブレイクとなる企画会のメンバーが宛て職だと、僅か1年足らずで人が変わり、そのたびに元の木阿弥ということもある。その点で言うと、釜戸町は3年を目途に務めてもらうという考えだったはずである。

そもそも、なぜ釜戸小や稲津小が先進モデルに選定されたのかと考えれば、それは元々

地元が協力的だったからという前提がある。勿論、陶町や日吉町がそれに劣るということはないにしても、連携がスムーズに行きやすい環境は、元々もうそこにあったのだろう。

ただ一つ、気を付けなければならないのは、学校側に「協力していただいている」という意識が先行しすぎてはならないということである。コミュニティ・スクール化の目的は地域と学校それぞれに双方向のメリットをもたらすことであり、それを実感していく必要がある。先ほど、猛暑の時期に地域の方がミストを散布されたというお話があったが、これは子どもたちの安全もさることながら、地域住民全体に意味のあることだろう。学校のためであり、地域のためでもある活動を、無意識にではなく、組織として、意識的に行うことの出来るまちにしよう、というの、目指すところの一つだろう。

地区公民館の無い地域において、どのように協働活動を推進するか。これは、昨年度までも散々発議されてきたことである。吉村統括コーディネーターに良い知恵を出してもらい、活動の場を確保していただけたらと思う。学校の中に協働活動の拠点を置くということであれば、例えば放課後教室とは別に、学習が遅れがちな子どもを援助する活動や、印刷の補助、学校報作成の補助など、かえって手伝いやすいことが増えてくるとも考えられる。そもそも、どんな協力が求められ、それをどう解決してくのか、より具体的に、ニーズが見えてきたら詰めていきたいと思う。皆さんも、色々な所で要望を集め、組織づくりのための提言に活かしてもらえたらと思う。

・原賢志 東濃教育事務所教育支援課課長補佐

稲津町の取り組みを聞いてまず思ったのは、「目的やビジョンの共有をととても大事にしているな」ということ。スローガンを決め、じっくり進めていращやる。恵那市では、まず形から入って一気に組織化を進められたが、瑞浪市の「じっくり」はまさにその真逆。どちらが正解ということはない。地域にあった形で、連携を推進してほしい。

また、花火のお話からは「子ども達のために盛り上がることのできる稲津町」の温かな雰囲気を感じた。稲津町で思い出されるのが、本年度「岐阜県子ども支援賞」を受賞された中山修さん。中山さんは、農業体験を通じて子どもたちに地元の素晴らしさや郷土愛を伝えていращやる。明世町にも、ホテルの生育を通じ学校教育のサポートをされている奥村了さんがいращやるが、明確なビジョンを持ち活動されていることが素晴らしい。コミュニティ・スクール化の推進は、こうした方々や田口校長先生、吉村統括コーディネーターのように優秀な指導力を持った方のマンパワーに引っ張ってもらいながら、最終的には持続可能な活動となっていく必要があると思う。そうした意味で言うと、本日繰り返し挙げた「じっくりやる」という姿勢は、たのもしいと思う。

現在、稲津町には1700余りの世帯があると伺っているが、そのうち、現役子育て世代として「地域の子ども育て」に関わっているのは、500世帯程度ではないか。つまりは、関わっていない世帯の方が遥かに多い。そこにどうやって活動を波及させ、巻き込んでいくのかもカギだと思う。

お手元に「東濃社会教育だより」をご用意させていただいた。年明け2月10日には、地域学校協働活動推進委員の育成研修を行う予定。瑞浪市の皆さんも、ふるってご参加願いたい。